

令和元年6月21日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2018

課題番号：17K18528

研究課題名（和文）破局的状況乗り越える思考と技法に関する研究：被害者の能動的危機突破力の可能性

研究課題名（英文）A study on ideology and practice of creative survivor over catastrophes

研究代表者

松田 素二（Matsuda, Motoji）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50173852

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：社会と共同体全体を破局的状況に追いやり、多くの人々の生命を奪い、生活基盤を根こそぎ破壊するような大規模な災厄が繰り返し生起している。

本目的は、破局的状況を経験した被害者・被災者がもつ自前の危機突破力に着目することで、現代世界の危機に対処するレパートリーを拡張する試みにつなげることにある。そのさいの核心は、彼ら被害者が創造し編成する新たな共同性である。異常な空間に他者への寛容性と開放性をもたらすことで、危機突破のための新たな共同性を生成している点に注目し、これまで被災・被害研究が見落としてきた危機突破の方向を展望する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

破局的災厄を経験し生き残った人々は、いったいどのようにして、災厄を乗り越えていくことができるのだろうか。

本研究は、外部からの支援ではなく、深刻で破滅的な被害を経験した当事者が、さまざまな異質な思考、価値観、方法をつなぎ合わせ、張り合わせながら、自前で危機を突破する力を創出し被害者自身が災厄を乗り越えよりよき生を創造するのかについてそのメカニズムを解明することで新たな視点を提供する。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on their own capacity to cope with those victims and sufferers of catastrophes, and it can extend options of problem-solving channel to survive the catastrophe in the contemporary world. The aim of this study lied in this point. What is most examined here is a creative capability of ordinary people to newly form communality and solidarity among themselves. Those victims/sufferers would bring tolerance and openness to others onto the spaces/worlds of catastrophe, and finally generate a new form of communality/solidarity. This new form has been overlooked and ignored by those studies of disaster so far.

研究分野：文化人類学、アフリカ地域研究

キーワード：破局的状況 巨大地震 ケニア ネパール 生活世界

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代世界はさまざまな種類の避難民を作り出している。例えばケニア社会を見ても、1960年代から続いている周辺国の内戦を逃れて UNHCR の難民キャンプに避難してきた人々、1990年代の民族浄化紛争、2007-8年にケニア社会を内乱直前まで追い詰めた「選挙後暴力」といった政治的動乱による避難民、気候変動による洪水や旱魃で故郷を追われた人々、政府や国際機関による資源開発や環境保全政策による開発・環境難民など、多様な理由で多様なタイプの人々がホームランドを離れてキャンプなどの新しい環境のもとで生を営んでいる。従来の研究においては、避難民が避難先で従来の社会関係をいかに再現的に構築できるかが問題とされてきた。オリジナルなコミュニティ（人間関係）を再生することが、避難民の適応を助け、苦難のトラウマを癒すと考えられてきたからである（Njogu, 2010）。しかし、現実にごうした「オリジナルな共同性の再現」の強調は、多くの問題を生み出している。例えば、それが内向きの閉鎖的共同性を強化し、異質な人びとや集団への区別と排除の原理に転換したり、雑多で多種多様な文化的・社会的背景を持つひとびとの間の共同性創出を阻害したりすることが指摘されている（Wanyeki, 2008）。

ごうした避難民の多様性と避難先における彼らの共同性の再現とその問題については、ネパール社会においても同様の議論が確認できる。ネパールは2015年4月25日大規模な地震が発生し、約1万名が犠牲となり、多くの避難民が今日も仮設テントで暮らしている。彼らに対してカトマンズ盆地の避難民援助組織はカーストやエスニシティの異なる人々が生活と食事とともにする状況が生じさせる緊張と不安定さを解消するために、分離の原則（オリジナルな共同性の再現）を採用した。その一方で、危機に際して生活の論理の共同性の再構築を展望する方向性も、マオイストによる武装闘争と社会運動を事例にした研究などの中に見出すことができる（Karki, 2011）。

本研究は、多様な避難民研究から、自然災害による避難民と政治的動乱による避難民を取り出し、「オリジナルな共同体の再現」論とは全く異なる視点から、彼らがオリジナルな社会を破壊された先に、いかにして新たな共同性を創造し、どのような共同体を生成するのかを検討する。

2. 研究の目的

現代世界において、多くの人々の生命を奪い、生活基盤を根こそぎ破壊するような大規模な災厄が繰り返し生起している。戦争や内乱時のジェノサイドあるいは巨大地震などの自然災害などによって、夥しい数の犠牲者が生まれ、コミュニティが破壊され、自身や家族の生命と安全を脅かされながら避難を余儀なくされる人々が大量に出現している。

ごうした破局的災厄を経験し生き残った人々は、いったいどのようにして、その災厄を乗り越えていくことができるのだろうか。たんに生の営みを継続し、生活世界を復旧するだけでなく、いったいどのようにすれば、よりよい生を、以前より充実した生を創造することができるだろうか。

本研究は、外部からの支援ではなく、深刻で破滅的な被害を経験した当事者が、さまざまな異質な思考、価値観、方法をつなぎ合わせ、張り合わせながら、よりよい生を築きなおして行くメカニズムを明らかにする。

3. 研究の方法

研究計画は4期に分け、初年度に1期と2期、次年度に3期と4期を実施する。現地調査は1期と3期に実施する。第1期はケニアとネパール社会において、歴史的に避難民を生み出してきた危機的状況を、地震などの自然災害と紛争などの社会的動乱に二分して俯瞰し、共同性の解体・混乱過程を把握する。第2期は、1期の現地調査に基づき、危機的状況において新たな共同体と共同性がいかにして生成されるかについて、災害と戦乱についてそれぞれ一つの危機的状況を取り上げ考察する。第3期は、ネパール研究者とケニア研究者が相互のフィールドを訪問して、共同体生成の類似性と相違性を確認する。第4期は、3期の調査の成果を共有しつつ、共同体の再創造について、生活知による複数の紐帯原理の接合という観点から比較総合する。分担者以外に、連携研究者、現地の研究協力者、若手研究協力者によってケニア班とネパール班を構成する。

初年度1期は、ケニアとネパール社会において、歴史的に避難民を生み出してきた危機的状況を、地震などの自然災害と紛争などの社会的動乱に二分して俯瞰し、共同体の解体過程を把握するための現地調査を実施する。第2期は、その現地調査の成果に基づいて、危機的状況において新たな共同体と共同性がいかにして生成されるかについて、災害と戦乱についてそれぞれ一つの危機的状況を取り上げ考察する。

2年目の第3期は、ネパール研究者とケニア研究者が相互のフィールドを訪問して、破局的状況下における避難民の共同体生成メカニズムの類似性と相違性を確認し、生活知による複数の紐帯原理の接合という観点から比較総合のための合同調査を行う。本研究の理論的挑戦の一つは、破局的状況に陥った人々が共同性を新たに編み出してその危機を突破していくメカニズムを明らかにすることを通して、災害・戦乱の被害者が自らの能動性に基づいて事態を解決する可能性を提示することであり、もう一つは、ごうした破局的状況下における共同性の生成が、民族文化や国家の政策とは別次元の、普遍的な生活世界の論理によって主導されている過程を解明することである。そのために、南アジアと東アフリカという歴史的にも政治・文化的にも

異なる二つの文明圏に属する社会において、それぞれ異なる破局を経験した人々の共同性構築のための実践を同一の視角から比較しながら、その普遍性の検討を行った。第4期として、創造的接合知としての生活知を理論的に検討し、両社会の研究成果を総合することによって定式化を試みた。

4. 研究成果

現代世界において、戦争や内乱時のジェノサイドあるいは巨大地震などの自然災害などによって、夥しい数の犠牲者が生まれている。こうした破局的災厄を経験し生き残った人々は、いったいどのようにして、その災厄を乗り越えていくことができるのだろうか。たんに生の営みを継続し、生活世界を復旧するだけでなく、どのように、よりよい生を創造することができるだろうか。この問いかけに答えるために本研究は、韓国、ネパール、ケニアの破局的災厄のサバイバーの生活世界に依拠して、より充実した生の創造の可能性を検討することを試みた。戦争中、広島と長崎に強制的に徴用され被爆させられた韓国人の元徴用工被爆者の恨のライフヒストリーからは、彼らが故郷に帰還後にどのように助け合い、日本と三菱に対する「補償」を求めて来たのかが明らかになった。彼らが採用した一つの方策は、日本と韓国における「法廷」を通じて奪われた生を取り戻す選択だった。

一方、カトマンズ盆地を襲った巨大地震によって生命、財産、コミュニティを破壊されるという経験を生きてきた人々は、正常な生活への復帰の拠点として、自らの手で簡易コミュニティセンターを建設し、高齢者のケア、女性の自立支援などのコミュニティ活動を自前で組織し始めた。こうした活動実績を活用して、コミュニティセンターへの公的支援の拡充を引き出し、より整備された拠点として新しい公的施設を獲得した。

ケニアにおける度重なる「選挙後暴力」などの政治的暴力の被害を受けてきたナイロビのインフォーマル居住地区の住民は、国際的なあるいは公的な支援ではなく、多様な方策を工夫してつなぎ合わせながら自前のポリシングシステムを創発的に構築し危機に対処するようになった。

このように破局的災厄からの脱出のために、「法」「コミュニティ」と「公的支援」「創発的連帯」など多様な処方箋をサバイバー達が創造していることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. Akira Furukawa, Origins of GA (Pit-Hole): Cultural History of Roadside in Nepal, Contributions to Nepalese Studies Vol.42-1, in print, 2019.
2. Motoji Matsuda, Genesis of Street Communitality: With Special Reference to the Political Culture of Street Violence in Nairobi, Diogenes(Online), <https://doi.org/10.1177/0392192117740035.1-10>. 2018.

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 松田素二、「アフリカにおける適用とモデル修正の試み」、国際文化学会第17回全国大会、2018.
2. 松田素二、「アフリカ研究・文化人類学の視点から」東南アジア学会、2018.
3. Motoji Matsuda, Anthropological Practices and Intervention Problem: Between Academism and Activism,, Cultural Anthropology Forum(招待講演)(国際学会), 2018.
4. Motoji Matsuda, Opening Remarks for the 7th African Potentials Forum, The 7th African Potentials Forum (国際学会), 2017.
5. Motoji Matsuda, Opening Remarks : Towards Collaboration of East Asian Anthropological Associations, Towards Collaboration of East Asian Anthropological Associations, (招待講演)(国際学会), 2017.

〔図書〕(計 6 件)

1. 松田素二、「アフリカから何が見えるのか」、福井憲彦、杉山正明などと共著『興亡の世界史人類はどこへ行くのか』講談社学術文庫、416(239-308)、2019.
2. Motoji Matsuda, 'Exploration, Science and Understanding Others: Thinking through Hedin's Trajectory', Kazuko Tanaka(ed.), The Explorer Sven Hedin and Kyoto University: Central Asia Fosters East-West Cultural Exchange, 257(185-200), 2019.
3. 宮本正興・松田素二共編著、『改訂新版 新書アフリカ史』講談社、784, 2018.
4. 松田素二、「探検・科学・異文化理解 ヘディンの軌跡を通して考える」、田中和子 編『探検家ヘディンと京都大学: 残された60枚の模写が語るもの』京都大学学術出版会、278(205-216), 2018.

5. 松田素二, 「異なるものへの不寛容はいかにして乗り越えられるのかーレヴィ=ストロースを手掛かりにして」、渡辺公三、石田智恵、富田敬大編『異貌の同時代 人類・学・の外へ』以文社、664 (495-524), 2017 .

6. Motoji Matsuda, Italo Pardo and Giuliana B. Prato (Eds.) The Palgrave Handbook of Urban Ethnography, Palgrave Macmillan, 575, 2017 .

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：古川 彰

ローマ字氏名：FURUKAWA Akira

所属研究機関名：関西学院大学

部局名：社会学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁): 90199422

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。